

○議長（森 弘秋君） 1 番 古川元規君。

○1 番（古川元規君） 1 番古川元規です。それでは、私からは、通告どおり、有機学校給食による農業ブランディングについて、この1 点に絞りまして質問をさせていただきたいというふうに思います。

昨今、野上元農水大臣の発案によりますみどりの食料システム戦略によりまして、有機農業への関心が高まっております。また、それとともに、学校給食に有機米や有機野菜を使う有機学校給食（オーガニック給食）に対する関心が高まっております。

その背景には、子どものアレルギーや発達障害、食材の安全性、保護者の経済的困窮、食品ロスなど、現在の学校給食が抱える多くの問題が指摘されています。また、有機学校給食によって、地域に有機農業を広める効果があることが報告されています。

実際、有機学校給食は、ヨーロッパ、アメリカ、韓国、ブラジルなど世界中で広がりを見せるとともに、国内においても、千葉県いすみ市では、通常のお米価格と有機米との差額を市が補填することで、市内全ての学校給食に使われるお米の有機米使用率100%を実現し、今ではお米以外の農作物についても、少しずつ地元有機食材の導入を進めています。その結果、農作物のブランド化と農業者の所得向上はもちろん、住民幸福度の向上にもつながっています。

農業者がなかなか有機農業に取り組めない大きな理由は、新たなコストをかけて有機農業を行っても、そのコストに見合うだけの販売先を確保できるかどうか分からず、リスクが高いということが挙げられます。給食で安定的に使われるということが分かっていたら、農業者も有機農業に取り組みやすくなります。

また、学校給食に有機食材を使うことは、子どもたちにもメリットがあると言われています。アメリカ、イギリスでは、刑務所に入っている受刑者にミネラルを十分に含むサプリメントを提供したところ、所内での暴力沙汰が4割も減ったという研究があります。その研究を受け、アメリカのウィスコンシン州にある学校では、地元の有機パン屋と組んでオーガニックの無料給食を学校で取れるようにし、校内に置かれた清涼飲料水の自販機も撤廃し、代わりに水や果物ジュースを置くようにしました。すると、ドラッグ、飲酒、銃携帯、暴力で荒れていた学校の雰囲気が一変し、学生たちも落ち着き、集中力も上がり、勉強に集中でき、成績も上がりました。さらには、校内警備のために雇われていた警察官も仕事がなくなったそうです。

有機給食だけで成績が上がるというのは多少言い過ぎかもしれませんが、これはもと

もと性格的に素直で普通に勉強もできるはずの子どもの本性が、ミネラル不足の食品によってゆがめられていたものが正常化して、本来の姿に戻っただけではないかと言われて

ています。

アメリカのジャンクな食品事情と日本の学校給食では、もちろん現状は全く違うとは思いますが、体と心を形づくる食に投資することは、子育ての村としての舟橋村の価値を高めることにもつながると考えます。

富山県においては、学校給食で有機米使用率100%を実現している自治体がない今こそ、いち早く有機給食の実現をすることが農業ブランディングにつながります。二番煎じでは、その効果は大きく薄れてしまいます。小手先の農業支援よりも、有機給食の実現こそが農業の基軸産業化と持続的な農業振興の大本命であると思います。

ぜひ、その実現への調査と秋からの試験導入、そして来年度からの有機学校給食の実現に向けて歩みを進めていただきたいと思いますとおっておりますが、当局のお考えをお聞かせください。

○議長（森 弘秋君） 教育長 早川誠一君。

○教育長（早川誠一君） 1番古川議員の、有機給食支援による農業ブランディングの提案についてお答えいたします。

議員のご説明のとおり、農林水産省では持続可能な食料システムの構築に向けたみどりの食料システム戦略が進められ、また令和3年から7年度までの5か年の第4次食育推進基本計画に、食育推進の目標の一つに、環境に配慮した農林水産物・食品の選択が掲げられております。

本村の小中学校における食に関する指導の一環として、地場産食材の活用を通じて、郷土の食文化への関心を高める指導を行っております。具体的には、村の予算からレタスやニンジン、ネギ等の地場産食材を学校給食で取り入れ、実際に収穫体験をさせていただいたり、生産者を招いて会食をしたりしております。

議員ご提案の有機農産物については、一昨年度11月の食育月間で初めて有機米を活用し、生産者である議員との会食ができたと聞いております。そして本年度は、有機野菜の日、学校のほうでは「エコ給食の日」と言っているそうですけれども、このエコ給食の日を設けて、旬の野菜と米を取り入れた給食を小中学校とも5回実施できました。

子どもたちからは、苦手だったけれども、このキュウリなら食べられるとか、舟橋村の有機野菜だよという、関心を寄せる声があったと聞いております。議員をはじめ生産

者の皆様には、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

このようなことから、食育の推進と併せて、SDGsへの関心や郷土愛を高める意味でも、今後も学校給食に有機農産物を活用してまいりたく、令和4年度にはエコ給食の日を増やししながら、子どもや保護者の反応を聞き取ってまいりたいと思います。

そして、その結果を参考に、村の農業ブランディング政策と併せて、地域と連携しながら学校給食を充実させてまいりたいと考えております。

以上でございます。

○議長（森 弘秋君） 古川元規君。

○1番（古川元規君） 今ほどは、ご答弁ありがとうございました。評判がよいというお話も聞きまして、大変うれしく思っておるところでございます。

ぜひ検討をしていただきまして、取り組んでいただきたいと思うんですけども、先ほど他議員さんからの質問の答弁の中にもあったんですけども、農業の基軸産業化を目指す中で、いろいろとやっていますよという中で、例えばドローンへの補助金だったりとか、雪害への負担軽減であったりとか、もちろんそれは意味のあることだとは思いますが、「あさいち」の開催も別に悪いとは思わないんですけども、それではやっぱり基本的には農業を基軸産業化するということとあんまり関係ないというか、負担軽減にしかないのでは、根本解決にはつながっていないかなというふうに思います。

産業化するというのは、やっぱり他業種以上に農業が魅力的な仕事となって、農業を持続的に行っていく、そういう担い手がどんどん生まれていく体制だと思いますので、そのような体制を構築するための最適な近道として、この有機学校給食の実現というのは非常に全国的にも今注目されている手段でありますので、検討を進めていただきたいと思っておりますし、またその進捗具合などを6月ないしは9月に再質問させていただくこともあるかと思っておりますので、ぜひよろしく願いいたします。

ありがとうございます。